

北村透谷と運動会

関 谷 博

1

北村透谷（明1「一八六八」→明27「一八九四」）が、三多摩自由党の人々と出会い、自由民権運動に関わるようになるのは、おおそ明治十六年の後半頃からで、十七年の始め前後が最も熱心かつ積極的であつたようだ。それを象徴するような事柄として、よく触れられるのが、当時透谷が着ていたというハッピーである。色川大吉氏の『明治精神史』^{〔1〕}から、その一節を引こう。

さて、このころ、透谷は、北村美那子の覚書によると、身を小間物の行商人にかえて、糸や針を車にのせ、村から村へ行商しながら八王子地方を放浪していたという。そのハッピーの背や襟や裾には、「土岐・運・来」という文字が紺地に白く染めぬかれていた。つまり、今や自分たちの希望を達成すべき時代が、めぐり来ているのだという昂然たる気概である。神崎清氏による「北村美那子覚書」には「村から村へ小間物の行商をしながら、自由民権の運動をして歩いたのである

う」と書かれているが私も同感である。このころの三多摩の自由党員たちは、「行商」に仮託して政治運動を行なった伝承を残している（村野常右衛門や村野栄吉の例——『三多摩政戦史料』）。ハッピーに文字を染めぬくというようなことも、ひとりのできるわざとするより、背後に同好の青年グループを想定した方が自然である。

当時、言論、集会の自由は極度に制限されて、民権家の啓蒙活動は半非合法的な状態においこめられていた。かれらはそのため、あるいは寄席に立ったり、壮士芝居を演じたり、観桜会、運動会、遊船会に託したり、行商人に身を変えたりして大衆に接する道を求めていた。そうした折の、かれらの奇抜ないでたちの一種として、透谷たちのスタイルもあつたのかもしれない。しかし、それらは「覚書」であるから、もちろん時も場所も真偽のほども確認できない。（傍点引用者）

右の色川氏の文章中、その後半「当時」以下について若干補足すると、明治十四年の政変によって最高潮に達した自由民権運動に

対して、政府は十五年六月の改正集会条例によつて、より徹底的な言論弾圧を行なつた。それまで學術演説会などといった名目で開催してきた演説会も不可能になつた。そこで民権家たちは、民権講談や壮士芝居を通じて、寄席や舞台の上から、運動を続けざるをえなかつたのである。この他、観桜会・遊船会という形の懇親会、運動会、そして行商を装つた伝道活動等で、彼らは民衆への働きかけを続けた。

さて、従来の透谷研究では一般に、この明治十七年开始の「時運来る」という「氣概」が、一年も経たぬうちに「世運傾頽」（この時期、透谷自身の書き残した「哀願書」と「富士山遊びの記憶」二篇のうち、「哀願書」中にみえる語）という、透谷の暗い時代認識に取つて替わつたことを記し、透谷の政治的挫折の意義云々を論ずるのが常道といつてよい。そして同年九月の加波山事件、十一月から始まつた秩父困民党の武装蜂起に対する透谷の共感度数を、おのおの論者がどの程度に想定するかに応じて、政治的挫折から文学へというドラマに、多少の彩りが加えられつつ語られてきてきた様子である。

本稿も、この透谷研究の常道に大枠で従うものではあるけれども、ただ、先の引用文中にある「運動会」の語に着目して、果たして透谷にとって自由民権運動への直接参加は何を意味したのか、私に再考の糸口を探つてみたい。

2

色川氏の前掲書では「デモ」などとルビがふられていたためか、この「運動会」について、筆者は長い間、大して意識することもなく見すごしてきた。しかし、今では、岩波日本近代思想大系21『民衆運動』の「Ⅲ 自由民権期の諸運動」の章に「懇親会と運動会」があり、その具体的なかたちを知ることができる。「23 旧自由黨員の運動会（神奈川）」を見よう（『自由新聞』雑報、明17・11／29）。

去る廿五日は前以て新聞紙上に広告せし如く、我が神奈川県旧自由黨員の面々凡そ五十余名、八王子なる広徳館に集会なしたり。登下該館の床の間に白地には朱字又淺黄地には白字もて孰れも自由の花と染め抜きたる手拭兩組を積置き、何か勝負遊の用意と覚へ、會員の揃ふを見て各自に鬪を探りて兩組の手拭を分ち取り、一同該駅のはづれなる子安大明神の森に出陣して、此に始めて赤白の敵味方と立ち別れて隊伍を成し、赤方には北に赤球又白方には南に白球を竹竿に高く掲げて各其本陣を占めたりける。斯くて相鬪の鐘を鳴らすと齊しく、双方入り乱れて球奪の勝負を争ふこと凡そ三十分ばかりにして遂に赤方の勝となりしが、

一時休憩後、第二回戦が始まったが今度もまた赤組の勝利。この球取りゲームの次は「綱引きの戯」。またまた赤組の勝ち……。なんのことはない、「運動会」とは私たちが現在小学校・中学校でやらされている、あの「運動会」そのものなのである。

文中に出てくる「広徳館」には、注が付され「十六年十月、訴訟の鑑定、代言人弁護人の紹介、紛争の仲裁などを取扱い、人権の保護伸長をはかる目的」で設立されたもの、「館主林副重、世話人石坂昌孝」と記されている。

石坂昌孝とは、明治十六年、透谷が三月から一ト月半程、神奈川県会の開催中に臨時書記としてアルバイトをした際知り合いとなった、三多摩自由党の領袖である。透谷は彼を通じて、その息子公歴を知り、民権家たちとのつき合いを広げていったのである（後には彼の娘「公歴の姉」美那子と結婚する）。だから透谷が、石坂昌孝の「若い取り巻きの一人」として、「運動会」に参加していたとしても、別段不自然とはいえないのだ。

もちろん、十一月二十五日の、この運動会に透谷が参加したかどうか、という話ではない。満年齢十五、六の少年が政治活動に加わる、という時、具体的にどのような活動をしたのかについて、或る程度の想像を働けた方がよいだろう、という問題である。

どこそこで運動会をやる、と決まれば、事前に会場を設営しなければならぬ。入口に仮設のアーチや提灯の用意。球取りゲームの球や籠・竿・綱引きの綱等の準備・運搬。今回のように紅白

の組に分けるのに手拭いを用いるのなら、「白地には朱字」「浅黄地には白字」で「自由の花」と染めぬいた手拭いの発注・受け取り作業なども、若者たちは分担してやったことだろう（他に誰がやるのか）。そして、いよいよ本番、運動会の始まりである。球取り、綱引き、その他諸々……。

「自由の花」と染めぬいた手拭いは、運動会終了後、恐らく各人が記念として持ち帰り、使いつぶしたことだろう。あの、「時・運・来」のハッピーも、この手拭いと同様に、或る日の運動会の折りなどに、ユニホームとして配られたものだったのではないだろうか。

透谷は多分、熱心にこうした仕事に従ったにちがいない。しかし、その熱心さの内容が重要である。

運動に全身全霊的に没入していたからなのか、それとも同志間の分担義務としてただ黙々と、機械的に従事していただけか。つまりは、この運動にどのような思想的意義があると、透谷は考えていたのか。遺品としてのこされたものの中に「時・運・来」と染めぬかれたハッピーがあった、という事実から、この問いに対する回答を求めることは出来まい。まして当時の時代・政治状況に対する透谷の認識を探るにあたって、ハッピーは何ごとも語ってはいると思う。

かつて自由民権運動は、反・政府的という点で、民衆による負債農民騷擾などと連続的なものとして扱われ、その差異がかならずしも明確にされてこなかったが、近年の歴史学は、この時期——明治十年代の政治状況を、〈政府—民権派—民衆〉の三極構造で説明するのが一般的となっている。³⁾

政府と民権派は、国家のあり方をめぐる政策上の対立点を持つてはいるが、社会の近代化そのものについては同一の方向を目指していた。徴兵制を導入するならば、国民を国政に参加させるべし、とする民権派に対し、政府は国会開設など時期尚早、という。しかし、徴兵制そのものについて、両者は一致して積極的である。義務教育も、その内容や進め方については民権派と政府の間に妥協を許さぬ対立があったが、義務教育そのものの推進は両者ともに賛成だった。これに対し、民衆の多くは徴兵制を忌避し、学制に反対したのである。稲田雅洋氏は、政府と民権派の対立は、近代化政策をめぐる「量的対立」であるのに対し、政府と民衆の対立は、近代文明を民衆が受け入れるか、否かをめぐる「質的対立」であった、とまとめている。⁵⁾

だとすれば、政府と民衆の間にあったのと同様の対立が、民権派と民衆の間にもあったはずであろう。両者間にもあったにちがいない、その「質的対立」について、民権派は、ではどう対応したのか？

自由民権運動は政治運動であるから、民衆の支持がないかぎり影響力を持ち得ない。エリート民権家たちは、壇上からさかんに高尚な民権理論や国家構想を説いた。しかし、度重なる集会条例の改正などによる言論弾圧は、彼らからその機会を奪ってしまった。とはいえ、言論弾圧だけが彼らエリート民権派の活動を阻んだのではない。民権理論のあるものは当時の民衆にとってすんなり同意できるものではなかったからだ。例えば、当時頻発した負債農民騷擾の要求内容は、契約がどうであれ、生活が困窮して借金返済ができないなら、貸主は当分の間返済猶予すべきだ、とか、返済期限を過ぎてからでも、借金を返せば抵当地は当然戻されるべきだ（「請戻し」）、といった、近世以来の土地意識に根ざすものである。これは、明らかに近代的所有権の観念と両立しない。

だから、自分たちの生活信条とどこか不具合で、またこむずかしくもある 弁士の演説が長く続くと、その内容についてゆけずに居眠りを始める聴衆も多かったという。そんな聴衆に対して、何より彼らは無力だった。

そこで、民権家の中から、小むずかしい議論ではなく、政府批判や警官・官吏らを激しくこき下ろすことで、聴衆を熱狂させる、土族根性丸だしの者が出る。エリート民権派の代表的人物のひとり末広鉄腸は、その手の運動家を「粗暴書生」と呼んだが、なるほど彼らの主張するところの、「われわれ民権派が天下を握れば、徴兵免除、減税、米価統制、借金棒引きが実現する!!」⁶⁾は、民権

派の政治的原則を明らかに裏切るものだった。減税はともかく、その他の主張はいずれも、国民化運動に対する逆行であり、近代的諸原理の否定だからである。民権派と民衆の間の「質的対立」は、民権派内部の、エリート層と「粗暴書生」＝壮士層の対立にズラされ、曖昧化された、というところであろう。

そして更に重要なのは、いささか逆説的なことなのだが、それまで政府もエリート民権家も成功しなかった、民衆の国民化という課題解決を、他ならぬ、国民化否定の論理を許容することで民衆に接近する道を選んだ、右の壮士型民権派が達成した、という事実である。その舞台となったのが、運動会だった。

牧原憲夫氏の文章を、少々長めに引用する。⁽⁶⁾

……演説会に対する抑圧がひどくなると、寺社の境内や河川敷などで、壮士らが紅白（民権派と政府派）に分かれて綱引き・旗奪い・棒倒しなどをしてみせる民権運動会がデモンストラーションの手段として活用された。だが、その会場には「自由万歳」と並んで「天皇万歳」や「日の丸」の旗が掲げられることが珍しくなかった。たとえば、長野県の千曲川の河原で開かれた「小兒自由党」の運動会では、「自由棲処是我郷里」「天皇万歳」「自由万歳」などと書かれた^{むらぼた}蓆旗が立てられ、大勢の村人が見物するなか、小兒約一六〇名が競技をくりひろげた（『自由新聞』八四年六月七日）。宮崎県の野

外演説会では、「中央に国旗を翻えし四方には自由万歳、压制撲滅など」と記したる旗を押立て」た（同前、八四年六月一七日）。北陸七州懇親演説会でも、「会場の門前には種々の花卉をもて構造したる一大緑環門（アーチ）を樹て、これに十把の国旗を挿」した（同前、八四年九月二七日）。「国旗」はまさに愛国心のシンボルだった。

さらに、五箇条の誓文などを朗読し、天皇は輿論に基づく政治を望んでいるのに専制政府がそれを阻害している、われわれ民権家こそ「聖慮」の実現をめざしているのだ、と自らの正統性を強調することも多かった。これは議会開設や輿論重視を政府に強要するためのレトリックだった。しかし、政府が「天皇は本当は民権を尊重し、民のことを心配している」とアピールしても白々しいが、民権派がくりかえし演説し、また「自由万歳」と「天皇万歳」の旗を並べたりすれば、多少の真実味が生まれてくるだろう。

民衆のあいだに客分意識や反政府感情が根強かった一八八〇年前後の時期、「国民」という意識や「天皇は国民の味方だ」という観念を浸透させるうえで一定の影響力を発揮したのは、政府よりもむしろ民権運動の側であった。

運動会実施の実働部隊として参加していた時、或いは彼自身は参加したことがなかったとしても、そうした時の実働部隊主力メン

バーであつたにちがいない石坂公歴ら若い壮士型民権家たちとの交流において、透谷はいったいどれほど、この運動會を通じての国民化運動に、理解と支持・共感を示したのか。そもそも、そこでこういうことが起こりつつあるのかについて透谷は、冷静な觀察者であつたか、なかつたか。

これらの問いは、彼にテロリズムへの志向があつたか、などといった関心とは全く別箇のものであつて、真剣に論じられるべき意義がある。それは透谷文学の核心に関わるからである。

私見によれば、透谷の文学は、国民の創造―捏造という問題をめぐつて明治二十年代に試みられた、最もユニークな思想的営為なのである。透谷は、運動会の狂躁と興奮の中で、民権派と民衆によつて合作された、天皇を中心とするところの、きわめて不出來な国民国家⁷の誕生する瞬間に居合わせていたかも知れないのだが、その時、彼が何を見、どう感じていたか、――これ以上興味深い問題は、そうあるものではあるまい。

4

先に述べたように、明治十六年中頃に知り合つた石坂父子を介して、透谷と民権家たちの交流が始まつたわけだが、同年九月、透谷は前年出来たばかりの東京専門学校（後の早稲田大学）政治科に入学する。授業にはあまり熱心でなかつたが、図書館に通つ

て、政治学・法学などをさかんに勉強したようだ。それから間もなく彼は、神奈川民権青年の東京合宿所である静修館に入る。民権青年の人脈はこうして一挙に拡まつた。例のハッピーを手に入れたのも、恐らくこの時の、『対人関係インフレ傾向期』とでもいうべき頃ではないだろうか。

図書館での読書を通じて日ごとに深まる政治・哲学的教養と、拡がる魅力的な人びとの出会い・交流の中で誘われるままに参加していった民権運動の現場での新鮮な体験。当時の透谷は、この二つを二つながらに、追い求めたように思われる。そして次第に、前者の、自分と自分の生きている社会の関係を思想的に探求してゆく仕事に、自分の天性を見出していったのである。

両者が一つに重なる場もあつた。石坂公歴らが主催する読書会である。透谷も数えると四名の静修館メンバーを含むこの読書会の実態は詳しく調べられているが、取り上げられたテキストは、透谷が専門学校で学んだと覚しい教科書との重複が多かつたようである。透谷は一度しか出席しておらず、もちろんレポーターもやっていない。民権家たちとの交流の場は、少なくとも知的には、好奇心を抱く対象ではなくなつていったことだろう。

しかし、民権運動の体験は、思想的営為に魅かれてゆく透谷に對して、知的関心とは異なる、強烈な印象を残さずにはおかなかつた。彼よりも五歳年長の民権青年・大矢正夫の存在、或は明治十七年九月に起つた加波山事件の領袖富松正安の運命（明治

十九年十月、刑死）がそれである。大矢の人間的魅力は、長く透谷をとらえた。富松と「相語らひ、相盟ひし」（『大矢正夫自徐伝』）という大矢は、その言葉通り、明治十八年十月、朝鮮渡航計画の資金を得るために強盗を行ない、刑に服したのであった（その際透谷は、大矢に行動計画への参加を持ちかけられさへした）。

このように、自分に身近な人々にふりかかった苛酷な運命が、透谷の精神に後々まで重くのしかかったことは断じて無視できない。本稿が従来の透谷研究の常道に大枠で従う所以である。

それでもなお、筆者は、この時期に透谷が書き残した断片「哀願書」、特にその中の「世運傾頹」の語を、自由黨員による激化諸事件とそれに続く民権運動の退潮・崩壊といった事柄で説明し尽くすことに反対したい。むしろ、運動の退潮以上に、自由民権思想そのものの自滅・自壊のあり様を、透谷はそこに込めていたのではないか。筆者は「哀願書」に、甲申事変（明17・12/4）をめぐる、日本の民衆および民権派の反応に対する、透谷の幻滅を読みとるべきである、と主張したいのである。

透谷は「哀願書」前半で、「世界ノ大道ヲ看破スルニ弱肉強食ノ状ヲ憂ヒテ此弊根ヲ掃除スルヲ以テ男子ノ事業ト定メタリキ」と書いている。社会ダーヴィニズムに対する思想的な闘争宣言である。そう解釈しなければ「弊根」の意が通じない。そして、社会ダーヴィニズムに対する思想闘争とは、人権思想の哲学的基礎

づけに他ならない。だが、と文章は後半に続く。

然ルニ世運遂ニ傾頹シ惜ヒ乎人心未ダ以テ吾生ノ志業ヲ成スニ当ラザルヲ感スル矣嗚呼本邦ノ中央盲目ノ輩ニ向ツテ咄々又タ何ヲカ説カンヤ児ノ胸中独リ自ラ企ツル所指ヲ屈スルニ暇アラズ是レヲ施シ是レヲ就サントスルニ世運遂ニ奈何トモスルナキヲ知ル嗚呼奈何ナル豪傑丈夫ノ士ト雖何ゾ能ク世運ノ二字ニ

「世運」が「傾頹」した。「人心」が自分のやろうしている事柄とは別の方向へ向かった。「本邦の中央」の「盲目」ぶりに対して、何を説いても無駄のようだ……。つまり「人心」および「本邦の中央」が共に、人権思想の理解・深化とは別の方向へズレてしまった、という認識が「世運傾頹」の意味するところであろう。

甲申事変をめぐる「人心」および民権派の動きを、ここで「哀願書」と対照させてみると、次のようになる（またまた牧原憲夫氏に依拠する）¹⁰

…『自由新聞』は「天皇陛下ノ公使ヲ犯シ我日本帝国ヲ代表セル公使館ヲ焚キ、残酷ニモ我同胞ナル居留人民ヲ虐殺」した悪業を聞いて、「愛國ノ心アルモノハ誰レカ扼腕切齒」せずにはいられようか、「国旗上ノ汚辱ヲ雪ギ、我不幸ナル被害

者ノ為メニ……力ヲ尽クシ、彼「中国」十八省ヲ蹂躪」すべし（八五・一九）とさげび、『自由燈』もまた、「死ねや死ね／＼五十年の命、何の惜しかる国の為」（八四・二・二九）、「嗚呼我が日本男児よ、我日本刀を執れ」（八五・一・八）と煽動した。民権派を中心に義勇兵を結成する動きが各地にひろがり、抗議や追悼の集会も開かれた。たとえば、一八八五年一月の大阪決起集会では、中之島公園から七、八百人が旗・幟・太鼓・ラッパで市内を行進し、神社の境内で綱引き・旗奪い・相撲・撃剣で氣勢をあげ、終わって植木枝盛らが演説をする^{と五}、六千人が拍手喝采したという（黒木彬文「甲申政変と『福岡日日新聞』」、地方史研究協議会編『異国と九州』雄山閣出版、一九九二年）。民権運動会とおなじスタイルである。東京・上野公園の集会でも、慶応義塾・明治法律学校等の生徒を含め三〇〇〇人が参加し、雪投げ・旗奪い・綱引・相撲や「悲憤慷慨の演説」をしたあと、市内を行進し、比較的冷静な論調だった朝野新聞社の窓ガラスをこわすといったデモンストレーションをくりひろげた。（中略）青山墓地でおこなわれた磯林大尉の葬儀をはじめ、各地で執りおこなわれた犠牲者の葬儀・追悼集会にも多数の民衆が詰めかけた。さらには、「車夫馬丁に至る迄も、是非今回は支那とヤラねばならぬ、若しヤルに至らば我^{マイ}も幾部の力を尽すべし」と、わざわざ大井憲太郎の自宅までたずねてきた（大阪事件裁判弁論『大阪

事件関係史料集』

これは予期せぬ事態だった。これまで民権に関心を示さなかった者、示したとしても米価・税金・借金・徴兵がらみで、「国旗上ノ汚辱」などには「白河夜船」だった民衆が、ついに動いたのだ。
（傍線引用者）

このように民権派の煽った興奮と、中国・朝鮮に対する敵視・蔑視の中で、「わが日本」・「われわれ日本人」という意識が生まれたのである。運動会式国民国家捏造法^とといったところだ。「世運傾類」の語に透谷がこめた思いは、このような形で国民と国家が、自分の目の前でつくられつつあることへの、絶望ではなかったろうか。

透谷の自由民権運動体験を象徴的に語る、「時・運・来」から「世運傾類」へ^とという標語を、運動会をキー・ワードに見直してみたい。「時・運・来」については、そこからだちに透谷の気概のようなものを読み取るのは危険ではないか、と思う。そして「世運傾類」は、自由民権運動の弾圧による崩壊という以上に、その思想的破産に対する透谷の感慨がこめられていた可能性を示唆したいと思う。

この仮説に立てば、大矢正夫の誘いを拒絶するのは理の当然である。また、その後のキリスト教への入信については、日本的な

るものから限りなく遠ざかろうとする意志の表れとして、それを考察する道がひらけるだろう。例えば彼は、自由民権思想を、日本の歴史の地下水脈からとらえ直そうとしたが、その時彼が着目したのは、近松や馬琴、十返舎一九などであって、壮士型民権派の手垢にまみれた義民伝説ではなかった。^[1] 日本的なるものの否定によって、新たな日本を創造しようとする、透谷の困難きわまりない文学の出発点として、「世運傾頽」の語を受けとめたいと思う。

注

(1) 色川大吉『明治精神史(上)』(昭和三十九年発行の初版に基づく講談社学術文庫版。昭51・7)の一三二―二頁。

(2) 注(1)の前掲書、一七〇頁に、「運動会^{デモ}を起し演説会をひらいて」とあり、また一七二頁にも「(明18―引用者)一月十八日の上野公園のデモ(大運動会)は」とある。ちなみに後者は、注(10)として引用した牧原論文で言及されている運動会(傍線部分)を指している。

(3) 深谷克己・安丸良夫校注『民衆運動』(岩波日本近代思想大系21。平1・11。二二六―七頁)。

(4) 以下の記述は、主に稲田雅洋「困民党の論理と行動」(新井勝紘編『自由民権と近代社会』吉川弘文館。平16・3所収)に拠る。また、三極構造に基づいて描かれたこの時代の簡略な通

史としては、牧原憲夫『民権と憲法』(岩波新書。平18・12)がある。

(5) 稲田・注(4)の前掲論文(二六三頁)。

(6) 牧原・注(4)の前掲書(二八―九頁)。

(7) 天皇によって統合される国民・天皇の意志(「五箇条の誓文」)として実現されるべき民権……。こうした没論理の国家創造については、別の機会に既に一度紹介したことのある、宮村治雄氏の次の一節を繰り返し引用しておくと思う。

“宮村治雄は『開国経験の思想史』(東京大学出版会。平8・5。一六〇―一六三頁)で、自由民権派が『民権議院設立建白』を

提出した明治七年以降から、『五箇条御誓文』を国会開設要求の根拠の一つに引用することが多くなり、それと共に、「国会設立」という事業を可能な限り普遍的な問題の位相において捉えていこうとする態度」が後退していった、と指摘している。当然のことながら、それは『御誓文』の普及と流布とを通じての『天皇』シンボルの社会的浸透という役割」を、自由民権運動自体が担うことをも、意味した。”(拙著『幸田露伴論』翰林書房。平18・3。二二頁の注「16」)

(8) 色川・注(1)の前掲書(一〇七―一〇頁)

(9) 『哀願書』の執筆時期はよくわかっていない。明治十七年は、五月に群馬事件、九月に加波山事件、十一月に秩父事件、十二月に飯田事件が起っているが、「哀願書」はこの年の後半から、

翌・十八年の夏頃よりも前の間の執筆、ということが確実視されている。

(10) 牧原憲夫『客分と国民のあいだ』（吉川弘文館。平10・7。一四一―一四三頁）。

(11) 透谷は明治二十年頃、キリスト教伝道者ジョージ・プレスウエストの下で、「佐倉義民伝」の英訳の手伝いをしている。勝本清一郎は「キリスト教の犠牲的精神と宗五郎との関連だけでなく、自由民権運動と宗五郎との関連にも、心の奥で、余熱に似たものの意識される日が多かったかも知れない。」と指摘している（『透谷全集 第三卷』岩波書店。昭30・9。「解題」六九八頁）。もつともな指摘だと思う。問題は「余熱に似たものの意識」が下訳作業を励ます類いのものだったか、それとも障害と感じられるものだったか、である。

ちなみに、「日本人はどうも明治の講談本にだまされているようだ。」といい、義民伝説に基づく百姓一揆観を厳しく批判するものに、田中圭一『村からみた日本史』（ちくま新書。平14・1。特にその「第四章 百姓をだました幕府―百姓一揆の道理」を参照）がある。（政治小説）の再評価においても、傾聴すべき見解であると思われる。

〈せきや ひろし／本学教授〉